

俳句に於ける寫生（III）

山口青邨

「寫生といふことの根本義はこの寫生の技といふことにあるのです、世間の人は私達の文學を呼んで寫生主義の文學と申します、私達は必ずしも寫生主義の文學を偏重するわけでもなく、又、寫牛王義の俳句を片寄つて鼓吹するわけでもないのです、然し寫生の技を尊重するところから自然にその傾向が寫生主義と呼ばれるところのものになるといふことは争ふことの出来ない事實であります。」

その後、虚子はまた「花鳥諷詠」といふことを言つた。

「花鳥諷詠と申すことは花島風月を諷詠することであります、一層細密に言へば春夏秋冬四時の遷り變りによつて起る天然界の現象並にそれに伴ふ人事界の現象を諷詠する謂であります。」

私蓮の俳句は決して形骸ばかりを寫すものではない、客觀寫生と言ひ、花鳥諷詠と言つても單なる自然描寫ではない、自然も描き、人間も描き、思想も盛るのである。